2021年9月6日　第55号

JSSH NEWS
日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第64回日本手外科学会学術集会を振り返って

田　中　克　己
（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 形成再建外科学分野）

目　次

● 第64回日本手外科学会を振り返って
● 新名誉会員の御挨拶
● 手外科温故知新Ⅸ
● 手外科バトンリレー（第8回）
● Joyの声（第5回）
● 物故会員への追悼文
● APFSSH Newsletter “Hands-on”
● 日本手外科学会関連のお知らせ
● 関連学会・研修会のお知らせ
● 編集後記

まず初めにここに第64回日本手外科学会学術集会を無事に終了できましたことを会員の皆様方に心からの御礼とともにご報告をさせていただきます。ありがとうございました。

第64回日本手外科学会学術集会は新型コロナウイルス感染（COVID-19）の収束が十分には見通せない状況ではありましたが、平田理事長をはじめ理事会の強力なご支援とともに関係各位のご理解をいただき、2021年4月22日・23日に長崎ブリックホールでの現地開催を行いました。引き続き5月18日から6月18日までのオンデマンド配信をもってすべての会期を終えることができました。会員の皆様には、長崎にお越しいただけない方も多く、また、発表形式にもさまざまな制限が生じてしまい、多大なるご不便とともにご心痛をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げます。現地参加者数が400余名、オンデマンド配信の総アクセス数が約50,988件とハイブリッド開催としての学術集会における一定の役割を果たすことができました。幸い、現地開催においても感染者発生の報告は一人もなく、感染対策へのご協力とともに関係の皆様のお心遣いに重ねて御礼申し上げます。

長崎大学では初めての本学術集会の開催であり、形成外科学教室はもとより、当教室の祖であります整形外科学教室のお力添えもいただきました。先輩諸氏の手外科への思いを繋ぐことができましたことをたいへんうれしく思っています。

本学術集会のテーマは「手をつなぐ 手外科を繋ぐ Hand in Hand Together, Connecting History」とさせていただきました。歴史をつなぎ（History）、手外科学をつなぎ（Academy）、人をつなぎ（Nurture）、夢をつなぎ（Dream）、そして学会をつなぎ、社会へ貢献する（Society）ことを目指し、HANDS 2021と呼び、手外科の未来を拓く一助になればと願っております。海外からの講師の方々は残念ながらオンラインやビデオでのご講演となりました。また、理事長講演、招待教育講演、教育研修講演、シンポジウムとパネルディスカッションと特別症例セッションは現地での発表とオンラインのよる発表、質疑討論を行っていただきましたが、発表者ならびに座長の先生方のお力で、すべての会場で盛況で、活発な討論が行われ、たいへん素晴らしい2日間となりました。ただ、一般演題、ポスター演題の先生方には、オンデマンド配信となりましたこと、会場の人数制限などの感染対策上、現地でのプログラムにどうしても反映できなかったことを重ねてお詫び申し上げます。

「手外科を繋ぐ」テーマを考えるにあたり、本学会は現在、各種活動の多様化の中にあります。研究、臨床をはじめ専門医制度を含めた医学教育はその根底をなすものであり、加えて、各種の医療連携や人工知能の活用等も未来に繋ぐための必要な取り組みと考えております。本学術集会が未来の手外科を拓く助けになることを願っております。

閉会式で、次期会長への会長メダルとMilfordのハンマーをお渡しして、伝達式も無事に終了しました。来年は酒井昭典会長のもとに第65回日本手外科学会学術集会が2022年4月14日・15日に北九州市の小倉で開催されます。来年は平穏な中での素晴らしい大会となりますことを祈念いたします。

閉会式にて：次期会長（当日は酒井会長の代理山中先生）への会長メダルとMilfordのハンマーの伝達式

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

流山中央病院　**加　藤　博　之**

この度は、栄誉ある日本手外科学会（日手会）名誉会員にご推挙いただき、お礼申し上げます。2008年～20011年度、2016～2020年度の8年間は日手会理事、2017～2018年は日手会理事長として、日手会で仕事をさせていただく機会を得ました。長きにわたり、ご指導とご支援をいただきました日手会員の皆様、そしてご指導いただきました歴代学術集会長、理事長の皆様には心よりお礼申し上げます。また理事会、各種委員会で一緒に活動をさせていただいた皆様、事務局の皆様には、様々に困難な作業を遂行していく中でご協力をいただき、ありがとうございました。

日手会理事長としての私の主な仕事は、1）事務局業務のコングレからアイエスエス社への引き継ぎ、2）国際手外科学会連合（IFSSH）日本支部とアジア手外科学会連合（APFSSH）日本支部の活動を日手会の国際活動の一環とし、両支部の会計を日手会内に組み込んだこと、3）女性手外科医、地方在住手外科医支援のキャリアアップ委員会の常置委員会設置、4）「手の日」を8月10日とし日本記念日協会から認定を得たこと、5）日手会の財務改善と委員会統合によるスリム化などです。最も深く関わった委員会は、専門医試験委員会です。第1回の立ち上げから約10年間継続して委員、委員長、担当理事、アドバイザーを務めさせていただきました。年に7～8回は委員会があり、松本から東京まで片道3時間のJR梓の車両内で作成問題の練り直しや、委員会議事録の作成、点検したことなど、懐かしく思い出されます。

私は、医学部卒業直前に北大整形外科助教授をされていた石井清一先生にあこがれて整形外科に進み、卒後3年目の1982年に日手会会員となりました。最初の日手会誌筆頭論文は1984年の第1巻に掲載されています。これまで40年近く、日手会学術集会には毎年参加し、日手会誌に毎年論文を発表してきました。近年の日本整形外科学会内における手外科の立ち位置、国際手外科連合内における日本手外科学会のプレゼンスなどは、低落傾向にあると憂慮しております。現役の日手会会員の皆様には、ブレークスルーとなる研究、あるいは地道な臨床診療成果などを、国内外にアピールし日手会の再躍進に繋げますよう祈念しております。

今後の活動としては、頭脳と技術の許す範囲内で手外科手術を継続する一方で、academic hand surgeonとして研究も継続するつもりです。これまで私が筆頭著者、共同著者としてpeer reviewの国際雑誌に発表した論文数は、手・肘・末梢神経関連で174編です。これに、信州大の仲間と作り上げた地域住民運動器コホート“Obuse Study”関連12編を加えると186編になります。そこで、あと14編つまり生涯200編を目標に英文論文作成活動を続けたいと思います。これらの活動を通じて、微力ながら日手会に貢献したく気持ちを新たにしております。

会員の皆様には、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

手外科温故知新Ⅸ：
手外科を世界に広めた
Robert E. Carroll教授とその弟子たち

上　羽　康　夫

日手会名誉会員、医療法人白菊会理事長

手外科の恩師であるニューヨーク・コロンビア大学Robert E. Carroll名誉教授（92歳）は12年前2009年8月16日に他界された（写真1）。その愛弟子である札幌医科大学 石井清一名誉教授（83歳）が本年2021年4月26日に逝去された。お二人が成された偉大な手外科の業績は忘れられることはないであろう。ご両人の業績に深い敬意を表し、ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

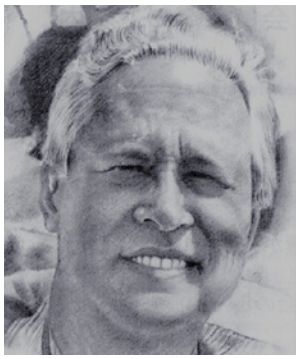


写真1　Robert E. Carroll教授
（1916.11.7.~2009.8.16.）

Ⅰ. Dr. Robert E, Carrollの手外科：Dr. Carrollは1916年11月7日マサチューセッツ・フォールリバーで生まれ、イエール大学からイエール医科大学に進学し、1942年に卒業された。軍役の後、マサチューセッツ総合病院で整形外科レジデントとして研修し、その間にDr. Henry Marbleから手外科を学ばれた。1946年ニューヨーク・コロンビア大学付属ニューヨーク整形外科病院に転任された時には当時の著名な手外科医：シカゴのDr. Sumner Koch、Dr. Michael Mason、Dr. Harvey Allen、サン・フランシスコのDr. Sterling Bunnellなどを訪問され、手外科の研鑽を深められた。コロンビア大学整形外科教授に32才で就任されたCarroll先生はニューヨーク整形外科病院で手外科を始められたが、その研究は多岐に亘った。臨床では外傷、先天異常手、キーンベック病などが中心であった。外来では貧富差、性差、年齢差に関係なく親切に対応されたので世界中から数多くの患者が集まって来た。毎週月、水、金曜日の午前に手術があり、内容も多彩であった。病棟回診は毎日あり、金曜日午後4時から整形外科カンファランスで手外科症例の活発な討論が行われた。毎日、夕刻には当日の外来・手術時に撮った写真を整理された。

Dr. Carrollの信条は①手の解剖・生理学の習得、②手外科手技の修得、③良書からの弛まぬ学習、④学習事項の記録と次世代への伝承であった。これらの信条は弟子たちに伝えられ、継承された。同門会が開催する勉強会にはそれが色濃く反映されていた（写真2）。

写真２　Carroll's同門会パネル討論会（キーンベック病）：右端はDavid Green、その左隣は上羽康夫。

Ⅱ. 弟子たちの活躍：1959年Dr. Carrollはアメリカで最初の１年制ハンド・フェロー制度を開設した。最初のハンド・フェローはDr. James M. Hunterであった。彼はシリコンを使ってハンター人工腱を造り、no man's landでの指屈筋腱断裂に対する新対処法を提案した。次は、Dr. James H. Dobynsであり、メイヨー・クリニックから手根不安定症carpal instabilityを提唱した。Dr. James R. Doyleは指屈筋腱鞘の研究を行い、A1～A5の存在を確かめ、指屈筋腱治療に大きな貢献をした。Dr. David Greenは1982年に“Operative Hand Surgery”, Churchill-Livingstone Co.初版を出版し、現在では手外科の世界的名著として知られる“Green's Operative Hand Surgery”の執筆・編纂を整え、世界中に手外科を広めた。Dr. Lawrence H. Schneiderはフィラデルフィアのトーマス・ジェファーソン大学教授としてDr. Hunterと協力し、ハンドセラピストの育成に力を注ぎ、1990年には最初の本格的なハンドセラピィ教科書“Rehabilitation of the Hand”, C.V. Mosby Co.を編纂し、医療分野の一つとしてハンドセラピィを確立させた。Dr. Carroll同門会にはその他にも多数の著名な手外科医が居る。アメリカ手外科学会々長を務めたのはDr. James Dobyns、Dr. David Green、Dr. Dean Louis、Dr. William Seitzなどである。

Ⅲ. Carroll's国際ハンド・フェロー（international hand fellow）：Dr. Carrollは外国の手外科医の教育にも大きく寄与した。例えば、トルコのDr. Ayan Gulgonen、ドイツのDr. Ulrich Lanz、そして日本の手外科医などである（写真3）。

写真３　イスタンブールにて：左から梁瀬義章（日本）、Prof. R.E. Carroll、William Seitz, Jr.（米国）、Ayan Gulgonen（トルコ）、上羽康夫（日本）。

日本からは田島達也先生や東 暲先生など多くの手外科医がDr. Carrollを訪問されたが、正式に一年間Carroll'sハンド・フェローとして勤務したのは私が最初であった。私は横須賀U.S.海軍病院でインターンを終了した後に京都大学整形外科の副手として働いたが、1962年1月から米国ボストン市民病院にて一般外科レジデント・整形外科フェローの勤務をした後、バルチモア市、ニューヨーク市で整形外科レジデントの修練を終え、1965年7月よりコロンビア・プレスビテリアン医療センターでDr. Carroll's 国際ハンド・フェローとして1年間の手外科研修を受けた。コロンビア・プレスビテリアン医療センターでは、主にDr. Carroll手術の助手、整形外科カンファレンス出席、スライドの整理であった。しかし、ハーレム医療センターでは手外科フェローとして外来診察、手術、病棟回診などの総てを自分で行い、それが手外科修練の主体であった。手術時には整形外科医であり手外科医であったDr. Auther Garns、コロンビア大学形成外科准教授のDr. Francis Symonsと形成外科チーフレジデントが助手を勤めて下さった。種々な症例の診察・手術を経験し、とても有益な1年間であった。特に、整形外科と形成外科の基本手技が学べたのは有り難かった。1966年秋に帰国し、京大整形外科の勤務を始めたが、約1ヶ月経った頃に北大整形外科の石井清一先生から手紙が届き、「アメリカで手外科を学びたいが何処に行くのが最も良いのか教えて欲しい」との内容であった。私は躊躇なくDr. Carrollを推薦した。石井先生はDr. Carroll'sハンド・フェローとして手外科を学ばれ、帰国直後には北大整形外科の手外科を担当されていたが、やがて札幌医大整形外科教授として北海道手外科のリーダーと成られた。1981年には石井先生の後輩であった薄井正道先生（北大・札幌医大）と梁瀬義章先生（京大）のお二人がCarroll'sハンド・フェローとしてニューヨークで手外科を学ばれた。私達は学会でしばしば顔を合わせて親しくなったばかりでなく、切磋琢磨して手外科に励んだ。石井教授と北海道の先生方により手外科の基礎研究は飛躍的に発展したのである。1986年11月3～8日第3回国際手外科学会連合（IFSSH）が東京で開催された。それに引続き11月9～11日にはPost-congress京都学会が開催されたが、Dr. Carrollとその弟子たちは京都学会にも参加し、大いに学会を盛り上げて呉れた。特に、Dr. Hunter やDr. Dobynsは学会発表をして呉れたばかりでなく、司会をも務めて呉れた（写真4）。

写真4　3rd IFSSH Post-congress 京都学会にて：座長 James Hunter＆副座長 Yasuo Ueba。

1991年には私が第35回日本手外科学会を京都で開催し、翌年1992年には石井先生が第36回日本手外科学会を札幌で開催されてDr. Carrollを招待されると彼は大いに喜び、快く特別講演をして下さった。

1998年石井清一監修「図説 手の臨床」メジカルビュウ社が企画された時には札幌医大の先生方に交じって私も著者の一人に加えて頂いた。また、Dr. Carrollの教授退任祝賀会には石井先生と私とは揃ってニューヨークに行き、祝賀会に出席し、同門会の勉強会にも参加した。その後も2人の交流は続いた。2009年Dr. Carrollの逝去が報じられた時には石井先生が当時Carroll'sハンド・フェローとしてニューヨークに居た藤尾圭司先生と連絡を取り、献花と会葬の指示を出して頂いた。令和元年に「手の日」設立を提案した時には石井先生が生田義和先生や加藤博之理事長と協議して「手の日」創設を実現された。彼とはCarroll'sハンド・フェロー仲間としての交友を続けたばかりでなく、心の義兄弟と思って交際していた。石井先生と二人で今後とも力を合わせて日本手外科学会を盛り上げようと語り合っていたのだが（写真5）、登山やスキーなどの運動が好きな石井先生にとってはコロナウイルス禍による外出禁止令は余りにも長過ぎたに違いない。Dr. R.E. Carrollと石井清一先生の遺志を継いで、今後とも我国の手外科を更に前進させたいと願う昨今である。

写真5　札幌にて：石井清一先生（向かって右側）＆上羽康夫（左側）。

手外科バトンリレー（第８回）
田島先生と津下先生の思い出

麻　生　邦　一
麻生整形外科クリニック

1. 田島先生の思い出

昭和46年に九州大学整形外科学教室に入局し、4年目の研修から小林 晶助教授、光安元夫講師が御指導される手の外科グループにはいり、手の外科の勉強を始めました。昭和53年8月に光安先生から新潟大学田島達也教授のもとでの研修を薦められ、勉強に行かせていただきました。当時田島先生のもとには斉藤英彦先生、吉津孝衛先生という飛車角とも称すべき門下生がおられ、田島先生総帥のもと、その先生方に率いられた手の外科グループは昼も夜も大変活発に精力的に仕事をされていました。私はアメリカ式の新しい手の外科に接し、日々感動し、夜遅くまで勉強したことを思い出します。手の外科班のカンファレンスは、夜8時から延々と夜中近くまで行われ、緊張感の中で議論が尽きませんでした。先生は手のお話をされる時は本当に楽しそうで、時間を忘れて嬉々としてお話をされていました。ある時先生が「今日のカンファレンスはすべて英語でやる」とおっしゃったことがあり、吉津先生が一生懸命に英語でプレゼンをなさっていたことを覚えています。またある時は、私に九大で行った腱の潤滑の研究を披露するように言われ、多くの鋭い質問に冷や汗をかきながら答えたことを思い出します。わずか3ヵ月間でしたが、帰学後の海外の学会でも新潟大学の教室員のように温かく処遇していただき、有難かった思い出があります。その後先生が育てられましたたくさんの優れたお弟子さんが活躍され、天国の先生はにこやかに満足そうに見守っておられることと思います。

2. 津下先生の思い出

新設の大分医大の開院の準備が一段落した昭和56年8月、念願の広島大学への留学が叶いました。津下健哉教授、生田義和講師、渡捷一講師、村上恒二先生、越智光夫先生とそうそうたる手の外科の先生方がおられ、活気に満ちておりました。手術、外来、教授回診、カンファレンスなどすべての時間に教授について回って手の外科の技術はもちろん、医師としての姿勢も学ばせていただきました。先生が関連病院へ手術に行かれる時には行き帰りのタクシーの中でいろいろと教えていただき、私にとりましては緊張の時間でもありましたが、至福のときでもありました。先生は決して威張らない、頭の低い、謙虚な方でした。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉を思い出させる先生でした。私のような若輩者にも懇切丁寧に教えられました。私の心に残っている先生のお言葉をご紹介させていただきます。

「たくさんの症例を経験することによって創意・工夫が生まれる！」

日本がアメリカに負けないためにはたくさんの症例を経験して、よく考えることだと仰っておられました。アメリカに負けない、という先生のお気持ちが伝わりました。

「組織の声を聴け！」

謙虚な先生のお人柄から生まれた手の外科手術の神髄と思います。組織を愛おしむように扱う優しい手技が大事であることを教えていただきました。

3. 終わりに

「田島・津下賞」と名前が冠せられたほどの日本手外科学会の巨匠のお二人に短期間とはいえ、教えを頂いた幸運、幸福を今も噛みしめております。私のような浅学菲才の者にまで、温かく親切に接していただき、そしてご指導下さいましたこと、今でも感謝の気持ちで一杯です。

Joy の声（第５回）

中　村　優　子

関西医科大学総合医療センター 整形外科

鹿児島大学整形外科医局の先輩である佐々木裕美先生よりバトンを頂きました。手外科専門医を目指す、一女性医師の立場から日々の診療にまつわる出来事を述べたいと思います。

私自身は北海道札幌市の出身ですが長らく東京で生活をしていたところを35歳で鹿児島大学医学部へ編入しました。初期研修医時代に興味をもった手外科医を志し、卒業後はそのまま母校の整形外科へ入局しました。地方大学の宿命でしょうが県内にたった一つしかない大学の医局は専門性よりも地域医療やへき地診療を求められがちです。また手外科専門医の少ない県には当然ながら認定施設も少なく、諦めそうになる時もありましたが、堀井恵美子先生とのご縁をいただき、現在は関西医科大学総合医療センター整形外科で日々手外科研修にあたっています。

手外科診療はひとりの医師の経験でカバーするにはあまりに守備範囲が広くバラエティー豊かであり、指導医、先輩、後輩、ハンドセラピスト等がチームを作って治療にあたり、屋根瓦方式で教育・研修ができることの大切さを学ぶとともに、大先輩方が常に世界ではどのような治療が行われているか最新の知見にキャッチアップし続けている姿にも大変刺激を受けます。

大阪含め関西地域には多くの手外科医が在住し、患者さんもその恩恵を十分に受けておられますが鹿児島県のような手外科医の少ない地域では、手外科医の診療にたどり着き最善の治療を受けられる機会を得ることすら難しい場合もあります。患者さんたちが他県であたりまえに行われている手外科医療の恩恵を享受でき、後輩たちが手外科に興味をもてる環境が母校にも作られることを願ってやみません。

また「Joyの声」という観点からみますと、女性医師として結婚出産と仕事の両立やジェンダーの問題はいろいろあるかと思いますが、私自身は子育てによって医師のキャリアを中断されたという経験もなければ、女性であるがゆえの恩恵は受けても差別や困難を感じたこともありません。むしろ「自分は女性だから」と男性医師に比べてどこか一歩ひいて尻込みしてしまうところがありましたが、堀井先生と出会えたことで、最大限の能力を発揮できるかどうかは個人の努力に依り、その天井を作っていたのは自分自身だったのだと目が覚める思いです。私自身も入局前には女性であるがゆえに体力やパワーで劣ることをハンデとして憂慮する気持ちもありましたが、整形外科医になってよかったと思うことはあっても悔いたことはなく、その魅力を若い女性研修医の先生方にも伝えることができればいいなと思います。年を重ねるにつれ何事もフットワークが重くなってきますが興味のあることならばどこへでも学びに行ける身軽さを持ち続けたいと思っています。

物故会員への追悼文

渡辺 好博 先生のご逝去を悼む

山形大学医学部整形外科学講座 教授　**高　木　理　彰**

日本手外科名誉会員、渡辺好博先生が令和3年（2021年）2月9日にご逝去されました。90年の長きにわたる人生でした。惜別の思いをこめて渡辺先生の足跡とお人柄を振り返りたいと思います。

渡辺好博先生は、昭和6年（1931年）新潟市でお生まれになりました。昭和30年（1955年）に新潟大学医学部をご卒業後、当時、第3代教授河野左宙先生が主宰されていた新潟大学整形外科学教室に入局され、整形外科医としての道を歩み始めました。昭和35年（1960年）に新潟大学医学部大学院修了されています。学位論文は「麻痺筋の機能代償を目的とする腱移行術（tendon transfer）に関する臨床的および筋電図学的研究」（主任：河野左宙教授、指導：田島達也助教授）（日本整形外科学会誌34, 1960年）でした。第4代教授田島達也先生のもとでさらに研鑽を積まれ、昭和42年医学部講師、昭和45年助教授に昇任されています。そして昭和51年（1976年）4月山形大学教授に就任されました。以来、整形外科学講座初代教授として定年退官された平成8年（1996年）3月までの20年間、教育、診療、研究に大変精力的にあたってこられました。昭和61年（1986年）からは山形大学医学部日中交流委員、平成3年（1991年）から委員長として日中交流にもご尽力され、中国をはじめ海外から大勢の留学生を迎え、国際交流も積極的に推進されました。バングラデッシュの医療支援にも赴かれています。ご退官後も山形大学名誉教授として教育活動も続けられ、あわせて山形県内の医療関連施設などの要職にも就かれ、地域医療にも引き続きご尽力されました。

山形大学ご在職中は、医学生教育、後進の育成に幅広くあたりながら、とりわけ、手外科・上肢、足の外科分野、さらにスポーツ医学、リウマチ性疾患、リハビリテーション医学の分野でも精力的にお仕事をされています。手外科分野やスポーツ医学分野でも多くの書物の出版にも携わられました。日本整形外科学会の監事、評議員のほか、教育研修会や日整会誌編集委員会の委員長も務められ、日本手外科学会でも、理事、用語委員会委員長、運営委員会委員長などを歴任されています。教室内でも大勢の手外科医を育てられました。チームとしての手外科医療の実践を常に心がけられた先駆のお一人で、昭和52年（1977年）、開院して2年目の大学附属病院で、渡辺先生に率いられたマイクロチームが世界で2例目となる二重切断手術を成功させたニュースがJapan Timesに掲載されると、海外からも様々な問い合わせが相次いだと伺っています。以来、県外からも二重切断の患者さんをはじめ、マイクロサージャリー分野の患者さんが数多く山形大学に紹介されました。第34回日本手の外科学会学術集会（平成3年：1990年）を主催されたほか、第7回日本足の

外科研究会（昭和57年：1982年）（現日本足の外科学会）、第3回東日本手の外科研究会（平成元年：1989年）、第9回日本整形外科スポーツ医学研究会（昭和58年：1983年）（現日本整形外科スポーツ医学会）、第47回日本体力医学会学術集会（平成4年：1992年）など、現在も連綿と続く多くの学会、研究会を主催されてきました。東北整形外科災害外科学会の幹事としてもご活躍され、東北地区の整形外科学や医療の興隆に貢献されています。

渡辺好博先生の温厚篤実なお人柄、熱心なお仕事ぶりに惹かれて、20年の間に130名を超える同胞が山形大学整形外科学教室に入局しました。今日の教室の礎を築かれ、山形県の整形外科医療の基盤形成にも大変尽力されました。スポーツが大変お好きで、東北整形災害外科学会や学内の講座対抗野球大会にも積極的に参加され、若手とともに楽しまれていた姿が今も思い起こされます。山なりの自然変化球を駆使される超軟投技巧派投手として相手チームには大変厄介な存在でした。昭和53年の東北整形災害学会親善野球大会では、母校新潟大学チーム相手に完投、勝利投手にもなっています。私の学生時代、恥ずかしながら、渡辺先生の整形外科学の講義の記憶は実はほとんど残っていません。ひとつだけ覚えているのは、確か最初の講義で、赤バットの川上、青バットの大下、というフレーズです。弾丸ライナーが持ち味の巨人軍川上哲治選手と、高く弧を描いて遠くまで飛んだ東急の大下弘選手が放つ弾道曲線を、当時の大講義室の大きな黒板に目一杯、そして颯爽と板書したお姿はとても印象的で、それが私への整形外科、スポーツ医学へのいざないであったような気がします。軟式庭球部の顧問をお願いしていたご縁もあって、気がつくと私も渡辺先生の教室に入局していました。ご専門にとどまらず、臨床、教育、研究あらゆる面でいつも多くの教えを頂きました。困ったり、悩んだときは、いつも傍らで励まして下さり、助けて頂きました。映画、落語、講談の分野にもご造詣が深く、同門会会長を務められていた頃は、教室の若手も幅広く様々なことに興味を持ち見聞を広めてほしいと、各界の著名人を同門会総会の折りにお招きして下さり、学問とは違った分野のお話しを聞く機会を作って頂きました。とても楽しい思い出のひとコマひとコマが鮮やかに蘇ります。同じ医学の道に進まれたお孫さんに付き添われて車椅子に乗られて同門会総会にご出席下さったのが3年前の冬。体調が優れない旨を伺ってお見舞いしたのが一昨年の夏。そのときは、変わらぬ優しい笑顔で迎えて下さり、大丈夫、大丈夫と、いつものようにお話しされていたのがお目にかかった最後となりました。

日本手外科学会は、大勢の先達をはじめ、学会員の皆様のお力で、現在、とても大きくなり発展を続けているように思います。中堅、若手の会員の皆様には、渡辺好博先生をご存じない方が多いかと思いますが、昭和から平成に至る時代の中で、私どもの先達のお一人として、日本整形外科学会や日本手外科学会の興隆にご尽力されたことも心にとどめおき下されば幸いです。最後に渡辺好博先生に思い新たに感謝の意を表するとともに心よりご冥福をお祈り申しあげます。

故 石井 清一 先生を偲んで

札幌医科大学整形外科　**射　場　浩　介**

日本手外科学会名誉会員である石井清一先生が令和3年4月26日にご逝去されました。享年84歳でした。思いもかけぬ恩師の悲しいできごとに、今も心に大きな穴が空いた気持ちです。

石井先生は昭和36年に北海道大学医学部をご卒業になりました。日本赤十字社中央病院（現在の日本赤十字社医療センター、東京）でインターンをされた後、昭和37年に故島啓吾教授が主宰されていた北海道大学整形外科教室に入局され、大学院に進まれました。大学院卒業後は、昭和43年からコロンビア大学附属New York Orthopedic HospitalのR.E. Carroll教授の下で、手外科を学びました。帰国後の昭和44年から北海道大学整形外科の講師となり、手外科班のチーフとして仕事をはじめられました。その後、昭和47年から助教授、51年には北海道大学保健管理センター教授になられて、昭和58年から札幌医科大学整形外科学講座の教授にご就任されました。そして、教授になられてから平成14年のご退官までの19年間で188名もの整形外科医を育て上げられました。

石井先生は北海道における手外科の第一人者として、多くのご業績を残されました。特に治療に難渋していた屈筋腱縫合術後の腱癒着の発生メカニズムや、変形性肘関節症の病態について詳細な検討を行い、多くの新しい知見を報告されました。また、オリジナリティのある様々な研究を教室員に指導し、多くの研究成果を上げられました。平成5年には第36回日本手外科学会を主宰されました。そして、多くのご業績が評価され、平成14年には日本整形外科学会学会賞（現・学術賞）を授賞され、平成22年には国際手外科連合から“Pioneer of Hand Surgery”として表彰を受けました。また、平成28年秋の叙勲におきまして瑞宝中綬章を受章されております。

石井先生は、多くの手外科医を育てられましたが、手外科に限らず整形外科の幅広い分野で、臨床と基礎研究の両面を重視した教育に力を注がれました。ご退官の際に編集された「北の医学校から」という本の中に、札幌医科大学に赴任された当時に執筆された以下の文章が掲載されています。「現在、私が最も情熱を燃やしていることは、教室の若い後輩をいかに育てるかということであります。この育てるということは悪いところを正すのではなく、正常なものをより大きく、より素晴らしいものに伸ばしていくことです。」「今は多くの種子が地面に散りばめられています。一粒の種子も無駄にすることなく花を咲かせるのが私の夢であります。」先生のこのようなお考えのもと、札幌医科大学整形外科でご指導を頂きましたことは、私にとりましてこの上ない幸せなことでありました。

先生からは、論文作成や学会発表時はもとより、臨床や研究において何かに取り組む場合には、“単純明快な思考”が重要であることをご指導頂きました。しかし、何度もご指導を頂いたにもかかわらず、これまでの自分の仕事を振り返ると、“単純明快に思考する”ことがいかに難しいかを実感しています。そして、石井先生に「先生な、それじゃダメだわ。」と言われている自分を思いながら、これからも勉強を続けたいと思います。

石井先生は、新しい知識や異質の考え方を教室員が自由に教室の中に取り入れる雰囲気を大切にしていました。このような自由な雰囲気と活気のある整形外科教室で仕事や勉強に専念できました経験は、私にとりまして一生の宝です。

いつも教室員みんなのことを気にかけて頂き、とても優しくて誠実なお人柄の先生でした。一方、学問には厳しく、私たちを整形外科医として正しい方向に導いて頂きました。本当にありがとうございました。石井清一先生、どうか安らかにお休みください。

山内 裕雄 先生のご逝去を悼む

順天堂大学医学部整形外科学講座 主任教授　**石　島　旨　章**

昭和6年（1931年）静岡県浜松市出身の山内裕雄先生は、医師それも整形外科医になることが運命付けられていた生い立ちをもつ方でした。それはご自身による記述からも伺い知ることができます。

「私の生家は、遠州浜松郊外の医家である。江戸時代は浜松藩の非常勤顧問医でもあったらしい。代々蒙濟という名前を襲名していた。三代目までは漢方であったが、明治初年に浜松藩士家から養子となった祖父四世蒙濟は順天堂でも教育を受けた西洋医であった。父も日本医大を卒業し外科学教室に籍を置いていたが、四世蒙濟の死去に伴い帰郷、実家を継いだ。二人とも西洋医ではあったが、先祖伝来の整骨を主体とした骨医者であり、遠州を中心として広く名声を博していた。」＊1。

昭和44年（1969年）4月に青木虎吉主任教授のもと助教授として順天堂大学に赴任されました。その後、昭和56年（1981年）に教授に昇任されています。

昭和57年（1982年）5月には第25回日本手の外科学会学術集会会長にご選出いただき、学術集会を主宰させていただきました。本件について故・津山直一東京大学名誉教授は、下記のように記れています。　さ

「第25回日本手外科学会の会長を務められたとき、まだ助教授であったので、これに対し異論がなかったわけではなかったが、私としては、手の外科学会会長が全く手の外科を専門にしていない、単に主任教授であるからという理由で会長をするという不合理な日本的現象を打破したい意図があったのである。」＊2

昭和63年（1988年）には順天堂大学医学部附属順天堂医院副院長、翌平成元年（1989年）から平成6年（1994年）までは同院長を務められました。この間、平成2年（1990年）に第1期工事が着工した現在の順天堂医院本館の立て直し工事の陣頭指揮をとられ、2年9か月の歳月を経て、平成5年（1993年）5月31日に現在の順天堂医院1号館が竣工されました。

平成5年（1993年）から1994年（平成6年）には第4代日本整形外科学会理事長、平成10年（1998年）から平成13年（2001年）には国際手の外科学会連合理事長を務められました。

山内先生は、2度の米国留学で得た広範な知識と欧米的な医学教育で教室に新風を吹き込まれました。ご専門の手の外科に加え、脊柱側弯症や関節リウマチの手指変形の機序解明と治療、手指人工関節の開発など多くの業績を残されました。さらに、手外科や整形外科領域にとどまらず、そして国内に限らず海外まで、極めて広い領域で多くの方々と交流があったことは広く知られているとおりです。それは、晩年よく口にされた「落花は枝に還らずとも」に象徴されるように、教室員にとどまらず、より広い視野のもと、世界的な整形外科や運動器疾患領域のさらなる発展を常に考えていらしたことと関連するのではないかと想像いたしております。

本年令和3年（2021年）に卒寿を迎えられるところでした。しかし、6月26日にご自身が建設にあたり陣頭指揮をとられた順天堂医院1号館の最上階にある特別病棟にて、奥様とご子息に見守られ89歳で永眠されました。

最後になりましたが、日本手外科学会並びに会員の諸先生方による故人への生前のご厚誼に対し、衷心より御礼申し上げます。

＊1　山内裕雄，柔整との孤独な闘い，骨・関節・靭帯　2007；20：487-488
＊2　津山直一，順天堂大学整形外科学教室同門会誌　山内裕雄教授退職記念号　1997；18-19

椎名 喜美子 先生のご逝去を悼む

一般社団法人 日本ハンドセラピィ学会 理事長　大　山　峰　生
副理事長　大　森　みかよ
副理事長　岡　野　昭　夫

日本ハンドセラピィ学会 特別会員 椎名喜美子先生が、2021年6月18日にご逝去されました。

椎名喜美子先生は、1988年に成しえた日本ハンドセラピィ学会の発足におきまして、故 田島達也先生（初代顧問）のご支援のもとに、多大な貢献をされました。そして、その後は2003年～2006年の4年間、本学会会長に着任されると共に日本手外科学会ならびに上羽康夫先生（次顧問）のご理解とご支援のもとに、本学会の発展と質の高いハンドセラピストの育成において並々ならぬご尽力を賜りました。現在、本学会の学術集会は日本手外科学会の学術集会と時と地を同じくして開催させて頂いておりますが、そこにはハンドセラピィは手外科との連携のなかで発揮できるという椎名先生の一貫したお考えが引き継がれています。

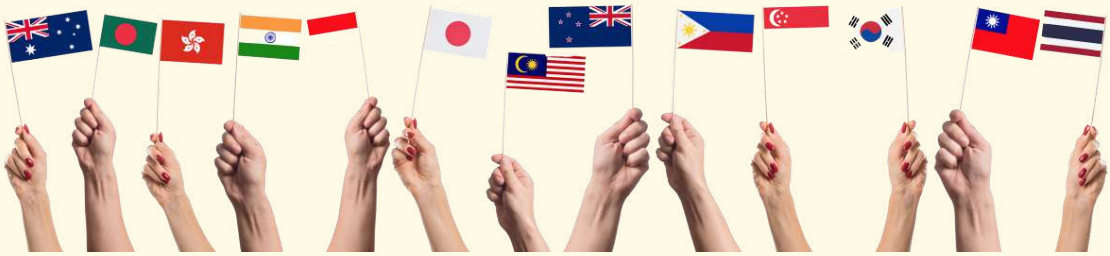
ここに、生前のご厚誼に深く感謝しご冥福をお祈りするとともに謹んでお知らせ致します。

VOLUME 1, ISSUE 1, NO. 1

JUNE 1, 2021

HANDS-ON

Biannual Newsletter
Asian-Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand



IN THIS ISSUE

President's Message
PAGE 2

Secretary General's Brief
PAGE 5

Journal Update
PAGE 7

Society in the Spotlight
PAGE 9

JHS-AP Article In-Focus
PAGE 12

Diversity in Hand Surgery
PAGE 14

News from IFSSH
PAGE 16

Report from APFSHT
PAGE 17

Member Society Status
PAGE 18

Upcoming Events
PAGE 24

"A journey of a thousand miles begins with a single step"
- Lao Tzu

Welcome to the inaugural issue of 'Hands-On', the official newsletter of the Asian-Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH). This electronic magazine was born out of a desire by the President and the current executive committee of the APFSSH to have greater communication between member nations and to be able to share information easily among hand surgeons in the region.

The success of this newsletter depends on the involvement and participation of all our members. Please support us by contributing letters, stories, short articles, and by advertising Hand Surgery related products and services.

Stay Safe & Happy Reading.

Editorial Team @ APFSSH Newsletter
Jennifer, Norimasa, Pankaj, Raymar & Sandeep

Message from Our President

Raja Sabapathy

A Vision for the Decade

My warm greetings to all in the APFSSH. We are in the midst of a pandemic, which has regrettably caused severe loss of lives and livelihoods. I am penning this message in the midst of a lockdown in our state. Times like these allow us to introspect and to look beyond. The good past gives you strength, and hope allows you to build a future.

As I write this, I am looking to set a goal for the APFSSH for the next decade. Tony Berger was kind enough to invite me to deliver the Presidential Guest lecture at the Melbourne APFSSH Congress which he conducted so well despite challenging circumstances. Speaking on the value of having purpose and goals for progress, I suggested 'Providing Quality Hand Surgery care to the Millions who are less privileged' as a purpose for the APFSSH. We are a 13-member Federation, representing 29% of the worlds population. Less privileged are those who are not able to obtain the necessary quality surgical care at the time they need it. It can occur in any country, and more often happens in developing countries. Research on delivery of surgical care points to lack of Awareness, Availability and Affordability as the main causes of this gap. As a Federation we can do our bit through education, teaching and training and spreading the successful best practice models to the world. This will occur through our meetings, journal, training fellowships, and now the newsletter.

> **"Providing Quality Hand Surgery care to the Millions who are less privileged."**
>
> **Raja Sabapathy**
> **PRESIDENT APFSSH**

The service gap will even be higher in many countries of Asia Pacific, who are not members of the Federation. Getting them into our fold is the important agenda of this Council. Anyone can help and do it. I would like to recollect as to how India joined the Federation. It is because of one man – Lam Chuan Teoh, who thought he would 'nudge' us to join. As the Secretary of the Federation as it was

being formed, Prof. Teoh had sent out a letter to all the hand societies in the Asian-Pacific region in November 1994 to participate in a meeting in Singapore in January 1995 and join the Federation. It is worthy to recollect some lines from the letter. 'Communication among the developed countries may not be a problem, but communication with less developed countries the problem seems to be unsurmountable. We have a difficult task ahead and we expect to move slowly.' India was one of the countries that had not responded.

International Faculty with SGH Team @ Advanced Instructional Course, January 1995
Standing (L to R): Ueli Buchler, AK Kour, Kazutero Doi, Luis Scheker, Yong Fok Chuan, Michael Tonkin, PC Leung, Simo Vilkki, CL Foo, KC Tan; Seated (L to R): Robert Pho, Alain Gilbert, Tatsuya Tajima, Ralph Manktelow, Teoh Lam Chuan
(Photo Courtesy Teoh Lam Chuan)

In January 1995, I had registered for the Advanced Instructional Course in Hand and Microsurgery and the Federation was being formed on the side-lines of the meeting. As I entered the hall, he loudly exclaimed, 'Hi, you are from India? I was looking for you. We are forming the Federation and we have not heard from your country. Never mind lah. Don't go off after the scientific sessions. Join the council meeting, listen and take the message to your country. You must make it happen'. He was also kind enough to extend an invitation for the dinner in a revolving restaurant in a high tower. I saw stars. That experience of being with Tatsuya Tajima, Wayne Morrison, Fu-Chan Wei, Robert Pho, Kazutero Doi, Michael Tonkin, and so many stalwarts who were representing their countries left an indelible impression on a young mind and that led

Message from Our President

Raja Sabapathy

Delegates @ Instructional Course
Dr Sabapathy and Dr Scheker having an animated discussion. Dr Panupan (red arrow) in the background
(Photo Courtesy Teoh Lam Chuan)

India to join. I would say that the proactiveness of Prof. Teoh to 'NUDGE' made it happen. So, I would request the members who have connections, friends and trainees in countries like Cambodia, Myanmar, Nepal, Pakistan, Sri Lanka, Vietnam and so many nations who are not members of the Federation to talk to them, 'nudge' and make them join. That would be the first step we take to reach our purpose.

While embarking on a major journey, we should celebrate small victories to make it pleasant. We have an occasion now - the inaugural newsletter. As your President, I congratulate and convey our appreciation to Jennifer, Norimasa, Pankaj, Raymar and Sandeep who made it happen.

Stay safe. Looking forward to meeting all of you soon.

Raja Sabapathy, President, APFSSH
rajahand@gmail.com

Secretary General's Brief

Fuminori Kanaya

An Eventful Year

I am happy to be able to report about the society's activities for the last year in this inaugural issue of our newsletter. We managed to have a very successful Congress in Melbourne in March 2020, just as many countries were starting to lock down for the Covid-19 pandemic. The meeting was well attended and organized under the able leadership of our current President-Elect Anthony Berger and his team. For many of us, Melbourne was the last physical congress we have had an opportunity to attend. Preparations are underway for the next Congress in Singapore from May 31st to June 3rd, 2023. We hope by then international travel would have normalized, but the planning team are catering for all eventualities. Singapore 2023 will also be the last of our congresses in the triennial format, as the meetings will revert after that to the biannual congresses that we previously had. This increase in the meeting tempo will provide hand surgeons in the region more opportunities to share their work and network.

> **"Towards making the Asian Pacific Hand Surgery community even more connected, cohesive, and vibrant."**
>
> **Fuminori Kanaya**
> **SECRETARY GENERAL, APFSSH**

Reach is an important part of the work of our federation. This newly launched newsletter is one means for us to better inform our existing and potential members and other interested parties about our work. In addition, our President Dr Raja Sabapathy has worked to revamp our website (www.apfssh.net), making it much more informative and useful. Please visit it if you have not done so. We are also asking individual member societies to contribute a short write up of their society to be featured on the site. We have also set up a society facebook account for better engagement (www.facebook.com/apfssh).

With the registration of the society in Singapore, we

Secretary General's Brief

Fuminori Kanaya

Opening of the APFSSH Bank Account
Alphonsus Chong, Anthony Berger and Goo Hyun Baek celebrating the milestone of the APFSSH Bank Account

have since managed to open a bank account to handle society financial matters. Formalizing a constitution fitting for our society and compatible with Singapore law was an important part of this work which was spearheaded by Anthony Berger, Alphonsus Chong, Sandeep Sebastin and Wendy Teo. The formal registration of the society and bank account is an important milestone in our history, and enable us to do much more. We greatly appreciate the donations from our Hong Kong and Japanese members to build our financial war chest, and more recently, Australia has donated proceeds from the 2020 meeting as well. We have also started collecting membership subscriptions. Thank you all for your support. These resources will greatly help our society achieve its aims.

The pandemic has put a hold on physical meetings and fellowships which we were planning to launch. Nevertheless, we are still working on our mission and engaging our members. We have strengthened our bench by adding the member-at-large (MAL) position to get more representation and diversity for the APFSSH leadership. We currently have three MALs and plan to increase the number by another two to make five.

Online AGM of the APFSSH (6 February 2021)

It has been an eventful year for the society. The next few years will be even more exciting as we push even harder to make the Asian Pacific Hand Surgery community even more connected, cohesive, and vibrant.

Take care and stay safe.

Fuminori Kanaya, Secretary General, APFSSH
fkanaya@med.u-ryukyu.ac.jp

Update on Our Journal

Goo Hyun Baek

To Improve is to Change

First of all, I would like to congratulate the executive committee on the birth of the APFSSH Newsletter.

The Journal of Hand Surgery, Asian-Pacific Volume is the official journal of the APFSSH. It was first published in 1996 as a biannual issue, became a triennial issue in 2005 and has been published 4 times a year since 2017. The title of our journal changed from Hand Surgery to The Journal of Hand Surgery Asian-Pacific Volume from 2016. Along with the American and the European Volumes of the Journal of Hand Surgery, our journal serves as one of the legs of a tripod to expand and refine wisdom on hand and upper limb surgery and related research.

Over the past few years, we noted a delay of about a year between acceptance of the article and publication. Early exposure of the accepted articles is important to the authors as well as the editorial office. We started an electronically published (e-pub) system from this year. Articles that are accepted for publication are 'e-pub' ahead of their print version and are available on pubmed and other databases. Of late, there has been an increase in the number of submitted articles. To address this, the editorial office has decided to publish the journal bimonthly from 2022 (six issues a year).

In 2020, 288 manuscripts were submitted to our journal from 37 countries. The acceptance rate was 39%. Most editors are trying to maintain or improve the quality of their journal. But this is a double-edged sword. The editor should pick up well-designed prospective studies or studies which proved 'something new' to increase the impact

"I think all the studies deserve to be published as long as they are well formatted and add value to existing literature"

Goo Hyun Baek
EDITOR, JHS-AP

Update on Our Journal

Goo Hyun Baek

factor. Certain journals do not accept case reports which decrease the impact factor significantly. However, impact factor cannot be the sole metric of journal quality. Techniques using expensive instrumentation or newer medical treatment may not be available in developing countries. Studies performed in the developing countries with poor infrastructure generally have greater difficulty in getting accepted.

I think all studies including retrospective case series or case reports, irrespective of whether they were performed in the developed or developing countries, deserve to be published as long as they are well formatted and add value to the existing literature. In this way, we can move forward together.

Stay Safe. Stay Inspired.

Goo Hyun Baek, Editor-in-Chief, JHS-AP
ghbaek@snu.ac.kr

List of Countries that Submitted Manuscripts to JHS-AP in 2020

No. of Manuscripts	Countries
74	Japan
38	India
23	United Kingdom
17	South Korea & United States
15	Italy
14	Australia
12	Singapore
07	Belgium & Turkey
05	China, France, Ireland & Malaysia
04	Thailand
03	Canada, Colombia, Greece, Hong Kong, Philippines & Spain
02	Egypt, Germany, Indonesia, Iran, Israel & Switzerland
01	Argentina, Brazil, Cyprus, Finland, Iraq, Netherlands, New Zealand, Oman, Russia & Taiwan

Society in the Spotlight - Bangladesh

Sajedur Reza Faruquee

Bangladesh Society for Surgery of the Hand (BDSSH)

The war for liberation of Bangladesh ended in 1971 and ushered in a phase of growth of our health care system. It was initially focused on providing basic health needs and addressing war related injuries. Specialty care in Orthopaedic Surgery and Plastic Surgery began in 1975. The nationalization of the major industries led to an era of rapid industrialization with a resultant increasing incidence of hand injuries. The treatment outcomes were poor, and complications were high, as there were no hand specialists around.

In 1988, Professor Ramdew Ram Kairy underwent training in Hand Surgery at the National University Hospital, Singapore. Upon his return, he started the practice of Hand Surgery. In 2004, Professor Kairy met Dr. Raja Sabapathy and Professor Bhaskaranand Kumar at the annual meeting of the Indian Society for Surgery of the Hand at Gangtok. He was encouraged to start a society for Hand Surgery in Bangladesh.

Historic meeting at NITOR on 18 August 2005 to form BDSSH
Attended by Prof RR Kairy, Dr. Md. Abul Kalam, Dr Sk. Abbasuddin, Dr. Monowarul Islam, Dr. OFG Kibria, Dr Shaymol C Debnath, Dr. ASM Monirul Alam, Dr. Shah MH Rahman, and Dr. Sajedur Reza Faruquee.

At a historic meeting on 18 August 2005 at the National Institute of Traumatology and Orthopaedic Rehabilitation (NITOR) in Dhaka, the decision to form Bangladesh Society for Surgery of the Hand (BDSSH) was made. The objectives of BDSSH were:

- To promote and direct development of Hand Surgery in Bangladesh.
- To foster and coordinate education and research in Hand Surgery.
- To have trained manpower, arrange instructional hand courses and to send young surgeons abroad for training.
- To establish an independent specialty in future.

Society in the Spotlight - Bangladesh

Sajedur Reza Faruquee

In 2006, Orthopaedic and Plastic surgeons that were interested in hand surgery were invited to become members of the Society. Later that year, by-laws and constitution of BDSSH were formulated and approved by 27 members with Professor Kairy as founding President, Professor Abul Kalam as founding Vice-President and Dr. A S M Monirul Alam as founding Honorary Secretary. The logo of the society was designed by Dr. Shah MH Rahman, showing two hands of a surgeon in a functional position protecting the national emblem and aiding growth.

We started sending surgeons for specialty training abroad. Dr OFG Kibria went to Stanley Hospital (Chennai, India) in 2004 under Dr G Balakrishnan and I received my hand surgical training in 2006 at Ganga Hospital, (Coimbatore, India) under Dr Raja Sabapathy. Since then more than 25 surgeons received training at different centers overseas. The 1st national conference 'BDSSHCON-06' was held at NITOR on 25 November 2006. It was attended by 125 surgeons from Bangladesh and there were 27 podium presentations.The first AGM of BDSSH was held and the first executive committee was voted in.

BDSSHCON-06, NITOR, 25 Nov 2006
(L to R): Dr ASM Monirul Alam, Prof Siraj-ul-Islam, Prof Shamsuddin Ahmed, Prof RR Kairy

'BDSSHCON' has been held annually since then and is attended by 150+ surgeons and includes a number of foreign faculty as well. Delegates from BDSSH joined the IFSSH congress at Sydney in 2007 and in 2008 at the delegates meeting at Lucerne, Bangladesh became the 50th member nation of IFSSH. Our membership had also increased to 63 at that point. We became the youngest member of the APFSSH at the Cebu meeting in 2017 and our members now regularly attend meetings and have presented scientific papers in Australia, Germany, India, Thailand, Singapore and the United Kingdom. Despite Covid-19 pandemic, five surgeons attended the last APFSSH meeting in Melbourne in March 2020.

The Bangladesh government has recognized Hand Surgery as a separate specialty. There are now 42 positions for Hand Surgeons at Government Medical Colleges across the nation. These include residents as well as professors. The Hand Surgery clinic at NITOR, now headed by Prof Jahangir, has been serving the nation since 2006. A Hand

Society in the Spotlight - Bangladesh

Sajedur Reza Faruquee

Team Bangladesh @ IFSSH, Sydney, 2007
(L to R): Dr ASM Monirul Alam, Prof NK Datta, Prof Kh Abdul Awal, Prof MA Samad, Dr Md Abul Kalam, Prof RR Kairy

Bangladesh becoming 50th Member of IFSSH, Lucerne, 2008
(L to R): Prof RR Kairy, Dr S Raja Sabapathy, Dr ASM Monirul Alam, Dr Md Abul Kalam

Surgery wing was started in 2017 at the Bangabandhu Sheikh Mujib Medical University, helmed by Prof KP Das. A post-graduate course in Hand Surgery was started at the Sheikh Hasina Institute of Burns and Plastic Surgery with a dedicated Hand Surgery Outpatient clinic. Hand Surgeons are practising in private sector also. Our membership has now risen to 101.

Team Bangladesh @ APFSSH, Melbourne, 2020
(L to R): Dr Lata, Dr Wee Lam, Dr Sajedur Reza Faruquee, Dr Monsoor, Dr Sumi

Sajedur Reza Faruquee, Honorary Secretary, BDSSH
rocky_29th@yahoo.com

Executive Body BDSSH

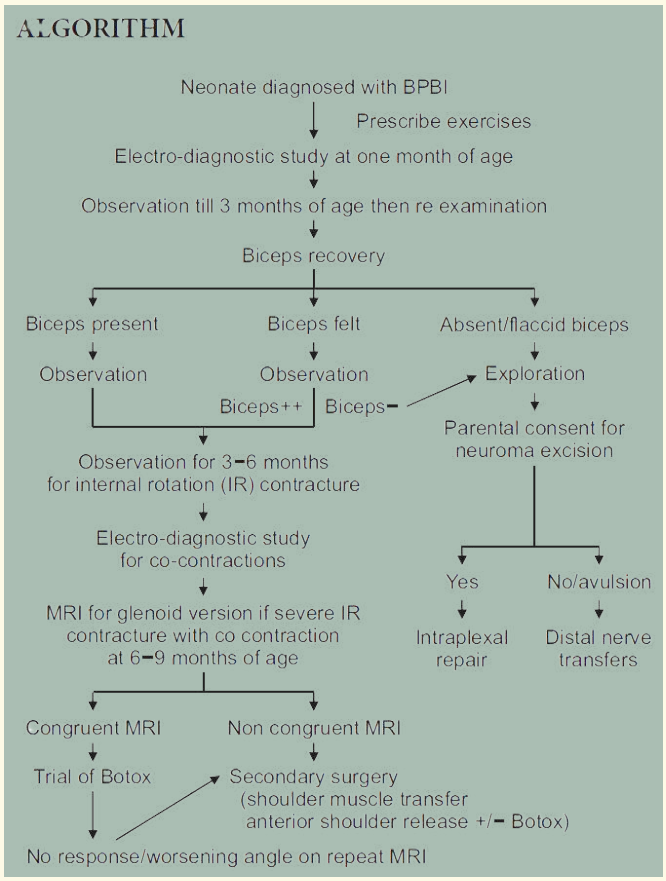
- President: Dr. Md. Abul Kalam
- Vice-President: Dr. Nakul K Datta
- Hon. Secretary: Dr. Sajedur Reza Faruquee
- Treasurer: Dr. Krishna Priya Das
- Joint Secretary: Dr. Md. Mohiuddin
- Editor: Dr. Tanveer Ahmed
- Members: Dr. R R Kairy (Ex-Officio); Dr. ASM Monirul Alam (Ex-Officio) Dr. Dipankar Nath Talukder, Dr. Md. Jahangir Alam, Dr. Md. Asraful Islam, Dr. Ahmed Asif Iqbal & Dr. OFG Kibria

JHS-AP Article In-Focus

Alphonsus Chong

Management of Birth Brachial Plexus Injury Including Use of Distal Nerve Transfers.
Thatte MR, Nayak NS, Hiremath AS. J Hand Surg Asian Pac Vol. 2020;25(3):267-275.

Brachial plexus palsy at birth is a well recognized condition where early diagnosis and treatment can optimize outcomes and prevent late complications. Although most patients spontaneously recover from these injuries, a significant proportion of them do not. For this latter group of patients, there is only a limited window in which nerve surgery is helpful.



In this timely review, the authors, who have extensive clinical experience with this condition, share their views on the initial assessment and treatment of birth brachial plexus injury. They point out key decision points in recognizing inadequate or no spontaneous recovery, pointing to a need for surgery. The article provides insight into the disputed area of timing and indications for surgery, as well as the different types of surgical reconstruction currently being practiced.

Finally the review provides the management algorithm that has worked for the author's practice, including surgical techniques such as the more standard intra-plexal repair of the plexus, as well as the more recently applied distal nerve transfers.

JHS-AP Article In-Focus

Alphonsus Chong

Time of Evaluation of Pain Catastrophizing after Surgery for Upper Extremity Motor Disorders. Hirata J, Inoue K. J Hand Surg Asian Pac Vol. 2021 Mar;26(1):41-46.

Pain is a common symptom and also influences outcomes following hand surgery. However, pain is variably experienced by different individuals. This can be explained by the fact that pain does not correlate perfectly with physiological insult or injury. Other factors, including cultural, interpersonal and cognitive aspects of the individual influence the pain experienced.

Pain catastrophizing occurs when a patient engages in cognitive activities which exaggerates the actual or anticipated pain, i.e. the patient approaches pain with a negative mental set. The level of pain catastrophizing is typically measured using a questionnaire and has been shown to predict pain outcomes, including intensity of post-surgical pain, response and misuse of opioids and persistent surgical pain. Pain catastrophizing has been shown to predict finger stiffness, grip strength and range of motion following distal radius fractures as well as lower patient satisfaction after carpal tunnel release.

However, the level of pain catastrophizing is affected by the pain a patient is experiencing. So the timing of evaluation may be important. This work addresses this question by studying changes in pain in the early post-operative period and their corresponding pain catastrophizing scores using a commonly used scale. They studied this in a range of upper extremity surgery ranging from finger fractures to rotator cuff surgery.

Their findings suggest that scale scores at 2-weeks post-op best predicts pain and Hand 20(a Japanese Hand Outcomes questionnaire) at 8 weeks. As the authors acknowledge, the limited scope of the surgeries performed and exclusion of patients with severe pain (which is not qualified or explained in their paper), limits the generalizability of their findings.

Alphonsus Chong, Deputy Editor, JHS-AP
alfchong@gmail.com

Diversity in Hand Surgery

Jennifer Green

Diversity at the Australian Hand Surgery Society 2021

The Australian Hand Surgery Society (AHSS) recently held the most diverse, albeit "virtual" Annual Scientific Meeting (ASM) in its history. The four outstanding guest speakers (below) were of diverse background and gender, the moderators were almost 50% female and there was strong representation of women among the speakers in the program. In addition, the 2021 AHSS ASM included the first ever diversity session.

Dr Eva-Maria Baur
Germany

Dr Paco del Pinal
Spain

Professor Max Haerle
Germany

Dr PC Ho
Hong Kong

Perhaps the most powerful statement of AHSS's dedication to gender equity is that 9 of the 17 (53%) Post Fellowship Education & Training (PFET) graduates in Hand Surgery to date are female. AHSS has strongly committed to diversity in hand surgery in its adopted Ethics Guidelines: "**AHSS is committed to diversity and gender equality in healthcare and to removing any practices that hinder that commitment. The AHSS strives to implement this commitment through its policies, practices, and inclusive culture. It is an expectation that every individual who attends the AHSS ASM is respected and treated equally regardless of their cultural background, gender, role or particular circumstance.**"

What is the science supporting the AHSS decision to support diversity? There is overwhelming evidence that diversity of the healthcare workforce is critical for healthcare equity. Hand surgery must reflect the composition of the community we serve in order to provide the best care– not only the women, but our indigenous and under-represented minority (URM) communities. There is increasing data in orthopaedics and other specialties showing the healthcare inequity that results from workforces that lack diversity. A man is between 3 and 22 times more likely to be offered a knee replacement than a woman with the same symptoms. The outcomes for orthopaedic trauma and arthroplasty are much poorer in URM patients

Diversity in Hand Surgery

Jennifer Green

in wealthy nations. A recent study of over a million births in Florida show that the survival rate of black infants increased by 50% when they were treated by a black doctor. Diversity in healthcare can be the difference not only between access to surgical treatment & poorer outcomes, but in some specialties it can mean the difference between life and death. What are the evidence-based strategies to increase the inclusion of women and URM in hand surgery? The strategies include creating visible role models; mentoring; mitigating bias in our selection process and appointments to leadership roles; and increasing flexibility in training for everyone. This requires commitment from the leadership and initiatives to support parenting, particularly during training. The nation with the highest percentage of women in surgery is Estonia and it is no coincidence that is also has the best parental leave and child support policies in the OECD.

Diversity is powerful. Diverse organisations attract the top talent (as they select from a larger pool of candidates), they are more innovative and they make better decisions. They are even more profitable. As the past chair of the Australian Orthopaedic Association Orthopaedic Women's Link, I became curious about diversity initiatives beyond Australia. The network snowballed and the result has been the formation of the International Orthopaedic Diversity Alliance (IODA) – a collaboration to advance diversity in orthopaedics representing all six continents. We are extremely fortunate to have the immediate Past President of the American Association of Orthopaedic Surgeons (AAOS) Kristy Weber, as our President with a rapidly growing membership of orthopaedic association presidents, surgeons, trainees, junior doctors, orthopaedic industry members and medical students. IODA is honoured to be supported by AAOS and the British Orthopaedic Association (BOA) and shall be hosting free webinar symposia from the AAOS (31 Aug-3 Sep, 2021) and the BOA (Friday 24 Sep, 2021) Annual Meetings in collaboration with Women in Orthopaedics Worldwide (WOW). WOW is a network including more than 40 orthopaedic women's societies. IODA welcomes hand surgeons – including those who are not orthopaedic - who are interested in diversity in surgery. Membership is free at www.orthopaedicdiversity.org

Dr Kristy Weber
Past President AAOS

Jennifer Green, Diversity Champion, APFSSH
jennifer.green1312@gmail.com

News from IFSSH

Marc Garcia Elias

International Federation of Societies for Surgery of the Hand

The IFSSH is 55 years old and is growing from strength to strength. Since the Berlin congress, the Ex-Co of the IFSSH is busy in formatting the new by-laws of the Federation. This is being done with the goals of ensuring greater member participation, increasing the opportunities in leadership positions in the Federation and reaching out to the needs of the Member nations.

The main change is the decision taken by the delegates to retain the triennial mode of congresses while moving on to a mode of leadership change once in two years. In addition, there will be an increase of the Member-at-large position to five from the present one. A regional distribution has been planned as per the number of member societies and number of members. One each from North and South America, two from Europe and one from the Asian-Pacific region will be selected. Elections for these posts will happen during the London Congress. We hope to have a meeting of the delegates of the member nations probably in the last week of June or first week of July to explain to the delegates the changes and the opportunities that will open up. Please ensure that your national delegate participates in this important meeting. Another matter of importance to the Asian-Pacific region is that it is a chance for the region to host the IFSSH 2028. The venue will be voted during the London Congress in June 2022. The timelines for submitting the bid process will be announced after the next delegates meeting. Meanwhile if your country wishes to bid, please get ready to welcome the world to your place by getting ready with an attractive bid.

IFSSH has a wonderful e-magazine called EZine and it is the 10th year since its publication. Past President Ulrich Mennon has steered it well over these 10 years. Please visit the IFSSH website www.ifssh.info to read the back numbers of the EZine and also to know the news and notes.

This year has been like no other due to the pandemic. While we all hoped that we will be free in 2021, the target still eludes us. I am sure it will soon be fine. Meanwhile be safe and we look forward to seeing you in London from June 6-10, 2022 for the next IFSSH congress. The team led by David Shewring and Jonathan Hobby are working very hard to provide us a congress to remember.

Marc Garcia Elias, President, IFSSH
garciaelias@institut-kaplan.com

S Raja Sabapathy, Secretary General, IFSSH
rajahand@gmail.com

Report from APFSHT

Hercy Li

Asian-Pacific Federation of Societies for Hand Therapy (APFSHT)

APFSHT, together with APFSSH, had successfully hosted a special and memorable Congress in Melbourne in March 2020 amid the Covid-19 pandemic. APFSHT council had collaborated closely with the Congress organizing committee in Australia led by Anthony Berger and Hamish

APFSHT Executive Committee Group Photo @ Cebu 2017

Hand Therapist Delegates from Hong Kong, Singapore, Malaysia and Bangladesh @ Melbourne 2020

Anderson to put forth an enriching programme for the hand therapists. Hand therapists from twenty over countries congregated and engaged enthusiastically with current updates in hand therapy and hand surgery topics. Shortly after the 2020 APFSHT congress, we have several exciting events in the pipeline. Currently, we are working along with IFSHT under the lead of Nicola Goldsmith, in planning for the 12th IFSHT Congress 2022 in London. Meantime, we are also gearing up for the next APFSSH/APFSHT Congress in Singapore in 2023.

If you are interested to know more about APFSHT, our members and our ongoing activities, please find us on our website. We look forward to many eventful regional and international meetings with the Asian-Pacific Hand surgery community.

Hercy Li, Immediate Past President, APFSHT
hercyli@gmail.com

Executive Body APFSHT

President:	Ahmad Yazid Jus (Malaysia)
Imm. Past President:	Hercy Li (Hong Kong)
Secretary:	Kris Tong (Singapore)
Treasurer:	Eng Wah Tan (Malaysia)
Historian:	Kent Chang (Taiwan)
Committee Member:	Cecilia Li Wai Ping (Hong Kong) & Seiji Nishimura (Japan)

Member Society Status - Australia

Jeffrey Ecker

Australian Hand Surgery Society (AHSS)

Australia has been very fortunate with the Covid pandemic. This is largely due to the fact that we are an isolated country and have implemented a quarantine system for returning travellers. In addition, we have a very efficient contact-tracing system where contacts of people who have tested positive can be quickly identified. At times, it was necessary to isolate and restrict travel between states within the country. We are now immunising the population. It is proving to be a challenge to get a sufficient quantity of vaccines and vaccines that people trust and feel comfortable using. Each state in Australia has fared differently and adopted slightly different approaches.

The impact on myself as a surgeon in Western Australia is that I cannot leave Australia without government permission and on return I will face two weeks of mandatory quarantine in a selected hotel. The problem with hotel quarantine is that it is still possible to get infected while in quarantine because the airflow is not appropriate for a quarantine situation. People have acquired the virus while in quarantine. We are coming to the realisation that this virus is something we will live with and that it will impact our economy in terms of debt. We have had social policies to keep people employed and keep small businesses open. This is an expense that will need to be repaid in the future. I believe that Australians have been remarkably fortunate in the way Covid has impacted our population. We feel very sad to see the impact of Covid on other countries.

Jeffrey Ecker, President, AHSS
jeff@ecker.com.au

Executive Body AHSS

President:	Jeffrey Ecker
Secretary:	Mark Rose
Treasurer:	Cameron Mackay & Ian Hargreaves
Newsletter Editor:	Douglas Wheen
Archivist:	Roland Hicks

Member Society Status - India

Pankaj Ahire

Indian Society for Surgery of the Hand (ISSH)

ISSH under the leadership of Ravi Mahajan continuously engaged with the members through periodic academic postings like Sunday Reads, Article of the month, Drawing of the month, Surgical Video of the month and a Monthly Journal club. ISSH also launched its YouTube channel.

Parag Lad conducted the CME on OrthoTV platform and had a collective viewership of more than 6000. Nilesh Satbhai's efforts with the 'webinar series' brought in stalwarts of Hand Surgery from across the globe to our screens. The first edition of IWS (ISSH Webinar Series) had eighteen, 90 minute heart-to-heart talks. IWS-1 is available on ISSH website for the members and on The MediTube for the non-members.

Ravi Mahajan
President, ISSH

Parag Lad
Member, ISSH

Nilesh Satbhai
Executive Member, ISSH

Praveen Bhardwaj
Editor, ISSH

ISSH & British Society for Surgery of the Hand (BSSH) conducted a joint CME in March 2021 led by Praveen Bhardwaj (ISSH) and Sumedh Talwalkar (BSSH). Our annual conference that was to be held in Chennai in August 2020 has been rescheduled to August 2021 as a virtual conference with BSSH as Guest society. As we improve our activities on digital platforms, we hope and await the post pandemic normalcy.

Pankaj Ahire, Secretary, ISSH
secretary@issh.org

Executive Body ISSH

Trustees:	G Balakrishnan, Bhaskaranand Kumar & S Raja Sabapathy
President:	Ravi Mahajan
Vice-President:	Mukund Thatte
Secretary & Webmaster:	Pankaj Ahire
Editor:	Praveen Bhardwaj
Historian:	Vikas Gupta
Executive Members:	Ajeet Tiwari, Amit Varade, Manoj Haridas, Nilesh Satbhai & Sanjay Kumar Giri

Member Society Status - Malaysia

Ruban Sivanoli

Malaysian Society for Surgery of the Hand (MSSH)

Greetings From Malaysia,

We are going through our biggest wave of COVID, We find ourselves trying to be safe while pursuing our goals of improving the quality of hand care and services to our patients.

We managed to organise our 16th Annual Scientific meeting together with the Malaysian Hand Therapist Society. It was held virtually from the 25th -27th of March 2021. Simultaneous tendon workshops in 7 different centres throughout our country were held on the first day. We had 15-20 participants for each tendon workshop and 192 doctors and 76 hand therapists for the virtual meeting. The meeting recordings have been posted on YouTube for your viewing (Day 1/ Day 2).

President MSSH, Dr Iskander at UKM Tendon Worksop

We will be hosting the 2nd Combined ASEAN Hand Meeting from 3rd-5th September 2021 at the world famous KLCC. This will be a hybrid meeting as we understand there may be travel constraints. We are in the midst of confirming a cadaver workshop for flap dissection and a saw bone workshop for internal and external fixators. There is a logo design competition for the ASEAN Hand Society. We would love for you to join us especially if you are from the ASEAN region. Please look for updates at our Facebook page and website.

Ruban Sivanoli, Honorary Secretary, MSSH
rubansivanoli@gmail.com

Executive Body MSSH

President:	Mohd Iskander Mohd Amin
Vice-President:	Jeremy Prakash
Honorary Secretary:	Ruban Sivanoli
Honorary Treasurer:	Shams Amir
Committee Members:	Aniza Faizi, Mohd Sallehuddin, Sachin Shivdas & Shalimar Abdullah

Member Society Status - Philippines

Raymar Sibonga

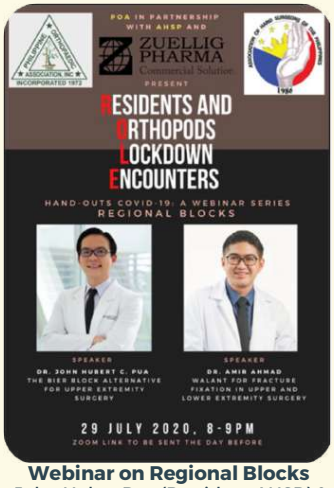
Association of Hand Surgeons of the Philippines (AHSP)

The latin phrase "Omnia mutantur, nos et mutamur in illis" means "All things change, and we change with them". The COVID-19 pandemic may have caught everyone by surprise, but not off-guard. The AHSP continued promoting medical education in hand surgery. During these difficult and uncertain times, we have organized webinar lecture series, with different orthopaedic training institutions nationwide and the Philippine Orthopaedic Association (POA). The society also launched its website "handsurgeons.ph" in order to facilitate online booking of appointments, and finding nearby hand surgeons based on patients' location.

Raymar Sibonga, Member, AHSP
raymar_sibonga@yahoo.com

Upper Extremity Workhorse Free Flaps
ASSH Webinar Emmanuel Estrella
(Past President, AHSP)

Webinar on Soft Tissue Surgery of Elbow
Nathaniel Orillaza Jr. (Past President, AHSP), Raymar Sibonga, Ajeet Tiwari (India) & Ellen Lee (Singapore)



Webinar on Regional Blocks
John Huber Pua (President AHSP) & Amir Ahmad (Malaysia)

Webinar on Hand Infections
Ameena Santos

Executive Body AHSP

President:	John Hubert Pua
Vice-President:	Eugenio Brito
Secretary:	Jessica Anne Gandionco
Treasurer:	Precious Grace Handog
Ex-Officio:	Nathaniel Orillaza, Jr.

Member Society Status - Singapore

Robert Yap

Singapore Society for Hand Surgery (SSHS)

Covid-19 has impacted us all. SSHS had to adapt to these changes. Our annual Hand review course and scientific meeting was postponed from 2020 and was held online via Zoom from 29 to 31 January 2021. It was attended by 148 participants. 44 local and international faculty presented at the conference. The Symposia on Advances in Reconstructive Microsurgery on 31 Jan 2021 included presentations from Prof Yuan-Kun Tu (Taiwan), Prof Sang-Hyun Woo (Korea), Prof Joon-Pio Hong (Korea) and Prof Zeng-Tao Wang (China).

Faculty and Participants @ SSHS Virtual Meeting January 2021

SSHS organized a Resident Review Series for Hand, Orthopaedics and Plastic Surgery resdents over a virtual platform on a weekly basis from 30 May to 18 July 2020 (8 sessions). The society also conducted 3 online teaching sessions for Hand Surgery trainees in 2020/2021.

- 26 Sep 2020, Lower Limb Reconstruction, Hand Surgery @ Tan Tock Seng Hospital
- 20 Feb 2021, Wrist Trauma, Hand Surgery @ Singapore General Hospital
- 20 Mar 2021, PIPJ Injuries, Ortho-Hand Partners @ Gleneagles Hospital

The SSHS Travelling Fellowship was suspended in 2020. The 6th Congress of the Asia Pacific Wrist Association scheduled for 2020 will be held along with the APFFSH meeting in 2023. SSHS intends to hold a joint meeting with the British Society for Surgery of the Hand from 11-13 February 2022 in Singapore. Further updates will be posted on the society's web page. Our society has 81 members.

Robert Yap, Secretary, SSHS
robertyap@yahoo.com

Executive Body SSHS

President:	Mark Puhaindran
Vice-President:	Sreedharan Sechachalam
Secretary:	Robert Yap
Treasurer:	Jackson Jiang
Editor:	Rebecca Lim
Committee Members:	Duncan McGrouther & Soumen Das De
Auditors:	Jacqueline Tan & Dawn Chia

Member Society Status - South Korea

Hyun Sik Gong

Korean Society for Surgery of the Hand (KSSH)

Members of the Korean Society for Surgery of the Hand (KSSH) are also suffering from the continued impact of COVID-19 and many local in-person meetings have been cancelled. Eager to see each other, at least online, we held two online symposia and a one day combined meeting.

- Triangular fibrocartilage complex injury: controversies and challenges on February 22, 2021
- Treatment of the contracture inducing hand malfunction: principle and strategy on May 3, 2021
- The Past, Present, and Future in Hand and Microsurgery" on May 29, 2021. Annual Combined Symposium of the KSSH and Korean Microsurgery Society

1st KSSH Webinar Symposium 2021

The number of attendees were more than we expected, reflecting the desire to continue learning and sharing knowledge in hand surgery. We found this platform was welcomed by our younger members who appreciated the time and energy saved compared to in-person meetings. We are planning to continue this bimonthly webinar.

The annual congress of the KSSH is planned for November 5-7, 2021 with Kwang Seog Kim (Chonnam National University) as Chairman and Jong Woong Park (Korea University) as President. We sincerely hope all members of the APFSSH stay healthy and happy through this difficult period.

Hyun Sik Gong, Scientific Committee Chair, KSSH
hsgong@snu.ac.kr

Executive Body KSSH

President:	Jong Woon Park
Chairman (Board):	Kwang Seog Kim
Director, General Affairs:	Hong il Kim
Treasurer:	Jae Sung Lee & Jin Soo Kim
Directors:	Dong Hyo Shin, Hyun Sik Gong, In Hyeok Rhyou, Jae Ha Hwang, Jae Hoon Lee, Jin ho Kim, Joo Yup Lee, Sae Hwi Ki, Seok CHan Eun, Seung Suk Choi, Soo Hong Han, Young Cheon Na, Young Ho Kwon & Young Ho Lee

Upcoming Events

Upcoming Events

Contacts

Office Bearers

President:	Raja Sabapathy	rajahand@gmail.com
President-Elect:	Anthony Berger	tony.berger@vhsa.com.au
Secretary General:	Fuminori Kanaya	fkanaya@med.u-ryukyu.ac.jp
Treasurer:	Alphonsus Chong	alfchong@gmail.com
Imm. Past President:	Goo Hyun Baek	ghbaek@snu.ac.krer
Members at-Large:	Michael Boland	michael@handsurgeon.co.nz
	Norimasa Iwasaki	niwasaki@med.hokudai.ac.jp
	Sandeep Sebastin	sandeepsebastin@gmail.com

Newsletter Editorial Team

Jennifer Green	Australia	jennifer.green1312@gmail.com
Norimasa Iwasaki	Japan	niwasaki@med.hokudai.ac.jp
Pankaj Ahire	India	drahire@hotmail.com
Raymar Sibonga	Philippines	raymar_sibonga@yahoo.com
Sandeep Sebastin	Singapore	sandeepsebastin@gmail.com

Contact Us

APFSSH SECRETARIAT

Alphonsus Chong
Department of Hand &
Reconstructive Microsurgery
National University Hospital
NUHS Tower Block, Level 11
1E Kent Ridge Road
Singapore 119228
Tel: +65 6772 5549
Fax: +65 6772 2358
alfchong@gmail,com

NEWSLETTER

Sandeep Sebastin
Orthopaedic & Hand Surgery
Partners
Gleneagles Hospital
#03-37 Annexe Block
6A Napier Road
Singapore 258500
Tel: +65 6970 7748
Fax: +65 6970 7758
sandeepsebastin@gmail.com

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第65回日本手外科学会学術集会◆

会　　期：2022年4月14日（木）～15日（金）
会　　場：西日本総合展示場、AIMビル
会　　長：酒井 昭典（産業医科大学整形外科学 教授）
詳　　細：https://site2.convention.co.jp/jssh2022/

◆2021年度日本手外科学会教育研修会◆

会　　期：2022年1月20日（木）～3月20日（日）
会　　場：WEB開催
主　　管：日本手外科学会 教育研修・オンラインマガジン運用委員会

◆第66回日本手外科学会学術集会◆

会　　期：2023年4月20日（木）～21日（金）
会　　場：京王プラザ
会　　長：佐藤 和毅（慶應義塾大学 医学部 スポーツ医学総合センター）

関連学会・研修会のお知らせ

◆第32回日本末梢神経学会学術集会◆

会　　期：2021年9月10日（金）～11日（土）※ハイブリッド開催
会　　場：宝塚医療大学 和歌山保健医療学部
会　　長：田島 文博（和歌山県立医科大学医学部リハビリテーション医学講座 教授）
詳　　細：https://www.congre.co.jp/32jpns2021/index.html

◆第13回日本手関節外科ワークショップ◆

会　　期：2021年9月25日（土）
会　　場：つくば国際会議場
会　　長：田中 利和（キッコーマン総合病院）
詳　　細：https://www.jwsw2020.com/

◆第30回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会　　期：2021年10月7日（木）～8日（金）
会　　場：京王プラザホテル
会　　長：武田 啓（北里大学医学部形成外科・美容外科学主任教授）
詳　　細：http://jsprs-kiso2021.umin.jp/

◆第36回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会　　期：2021年10月14日（木）～15日（金）※ハイブリッド開催
会　　場：三重県営サンアリーナ
会　　長：須藤 啓広（三重大学整形外科 教授）
詳　　細：https://site.convention.co.jp/joakiso2021/

◆第32回日本小児整形外科学会学術集会◆

会　　期：2021年12月2日（木）～3日（金）
会　　場：岡山コンベンションセンター
会　　長：尾﨑 敏文（岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授 整形外科学分野 担当）
詳　　細：https://www.kwcs.jp/jpoa2021/

◆第48回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

（第５回アジア太平洋マイクロサージャリー学会［12月１日（水）～３日（金）］との合同学術集会）

会　　期：2021年12月3日（金）～4日（土）
会　　場：つくば国際会議場
会　　長：関堂 充（筑波大学医学医療系形成外科）
詳　　細：https://site2.convention.co.jp/48jsrm/

◆第34回日本肘関節学会学術集会◆

会　　期：2022年2月11日（金）～12日（土）※予定
会　　場：ウインクあいち
会　　長：鈴木 克侍（藤田医科大学岡崎医療センター 病院長）
詳　　細：https://www.congre.co.jp/elbow2022/

◆第36回東日本手外科研究会◆

会　　期：2022年3月5日（土）
会　　場：つくば国際会議場
会　　長：西浦 康正（筑波大学附属病院 土浦市地域臨床教育センター 教授）

◆第34回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会　　期：2022年4月16日（土）～17日（日）※後日オンデマンド配信予定
会　　場：北九州国際会議場
会　　長：杉野 美里（貞松病院リハビリテーション科）
詳　　細：https://meeting.jhts.or.jp/web/34/

◆第65回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会　　期：2022年4月20日（水）～22日（金）
会　　場：ザ・リッツ・カールトン大阪
会　　長：上田 晃一（大阪医科薬科大学形成外科学 教授）
詳　　細：https://convention.jtbcom.co.jp/jsprs2022/

◆第95回日本整形外科学会学術総会◆

会　　期：2022年5月19日（木）～22日（日）
会　　場：神戸コンベンションセンター（神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場）
会　　長：大川 淳（東京医科歯科大学 整形外科学分野 教授）
詳　　細：https://joa2022.jp/

編　集　後　記

日手会ニュース55号をお届けします。昨年からの新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中、私達の生活は公私ともに多大な影響を受け続けています。この厳しい状況の中で、長崎大学形成再建外科学分野教授田中克己会長主催の第64回日本手外科学会は、ハイブリッド開催として、現地開催とオンデマンド配信で、多くの先生方が参加できる学会にしていただきました。これからのコロナ後の世界、学会の在り方にもつながると思います。今回の日手会ニュースでは、まず新名誉会員として加藤博之先生からお言葉をいただいています。そして、上羽康夫先生の手外科温故知新では、手外科を世界に広めたRobert E. Carroll教授とその弟子達について述べられています。Dr. Carrollの信条は①手の解剖・生理学の習得、②手外科手技の修得、③良書からの弛まぬ学習、④学習事項の記録と次世代への伝承であったことをお示しいただきました。第8回の手外科医バトンリレーでは麻生邦一先生が田島先生と津下先生の心温まる思い出について述べられています。また中村優子先生のJoyの声では手外科診療の環境作りの重要性について触れられています。また今年2月にご逝去されました渡辺好博先生の追悼文を高木理彰先生に、4月にご逝去されました石井清一先生の追悼文を的場浩介先生に、6月にご逝去されました山内裕雄先生の追悼文を石島旨章先生に、6月にご逝去されました日本ハンドセラピィ学会 特別会員椎名喜美子先生の追悼文を理事長の大山峰生先生にご寄稿いただいております。謹んでご冥福をお祈りいたします。また今回APFSSH Newsletterの掲載もさせていただいています。私達会員は、偉大な先輩の先生方の思い出を胸に刻み努力し、様々な立場の違いを乗り越えてより一層団結することで、手外科学会が日本のみならず世界でさらに発展していくことと思います。広報渉外委員会としても今後も盛り上げていきたいと思います。

（文責：兵庫県立加古川医療センター　中川夏子）

広報渉外委員会
（担当理事：古川洋志，委員長：岸陽子
委員：金谷耕平，佐藤光太朗，寺本憲市郎，中川夏子，原友紀）